

## 脳内月旅行

白百合学園高等学校 三年 櫻井 季音

「私は月にいる」という表現は、人々にどのようなイメージを抱かせるだろうか。私には、人類史上初めての月面着陸を成功させた、アポロ十一号を想起させた。また、その存在を通じて、不可能と考えていたことを可能にするという希望も感じさせた。突然だが、フランス語にこのような表現がある。「Je suis dans la lune.」直訳すると「私は月の中にいる。」という意味になる。だが、フランス語でのこの表現は、ぼんやりしている、うわの空である、といったことを表すのだ。現在、英語の代わりにフランス語を学んでいる私は、高校一年の四月、第一外国語として初めてのフランス語の授業でこの表現を学んだ。それ以降、言葉の持つ情景の美しさから強烈に印象に残っている。そして、この文を思い出す度、ぼんやりするという行動が、現代社会において悪になってはいないか、と疑問に思うのだ。

二〇一八年、「ボーっと生きてんじゃねーよ!」というフレーズが、流行語大賞のトップテンに入った。確かにボーっと生きず、何事にも常にアンテナを張ることで、知見は広がることだろう。ただ、ボーっと生きることが悪いことかと言うと、そうではないと私は思う。

私がボーっとしているとき、その多くはまさに先述したフランス語の表現の如く、月を見ているときである。眠りにつく頃に外に目をやると、特に満月の頃はちょうど、ビルの隙間から月が見えるのだ。昼夜問わず煌々と光る街の明かりとは一線を画し、都会の空というキャンバスを一点の輝きが引き締めている。その間、多くの人は溢れ返るほどの情報を手にしながら下を向いて歩き、小さな画面とアスファルトで視界を埋め尽くしている。私はビルの隙間から見える月の姿を一人で占領しているようで、贅沢な気分になるのだ。学生の身分からすれば、単語の一つでも覚えた方が身になるのであろう。しかし、時間が早送りで進んでいるような社会において、月を見ている間だけは、結果を求めない行動が許されるように感じるのである。

そして、何かアイデアがふっと湧いてくるのも、私にとっては決まってこのぼんやりとしながら月を見る時間なのだ。私は昨年まで美術部に所属していた。高校二年の夏、引退前最後の作品のモチーフがいつまでも決まらず、これといったものが

思いつかなかった。そうして迷い続け、一旦絵のことは忘れようと月を見ていたとき、ふとした思いつきでぼんやりしていた頭が一気に冴えた。海の月、クラゲである。その夏、私は友だちと一緒に足を運んで以来、東京スカイツリーのふもとにあるすみだ水族館に通うようになっていた。スカイツリーという東京を象徴する場所の一画、都会の喧騒から切り離された環境で過ごす時間は格別である。特にクラゲの展示エリアは照明が落とされ、ゆったりとした空間でクラゲだけが暗闇に浮かび上がっているのだ。まるで夜空の月のように。そうして月が照らし出したアイデアによって筆が乗り、最後の作品としてとても満足のいく出来となった。私は構図やテーマなど、作品に活用できる発見があれば、いつもメモに溜め込んでいた。だが何とも不便なことに、これだという発想は何も考えていないときにこそ思いつくものなのである。そう考えると私にとって、ぼんやりとする時間ほど価値のあるものは無いのではないかと思えてくるのだ。何をするでもなく、酔っぱらった会社員たちの陽気な声や時々通る車のエンジン音にただ身を任せる時間こそが、アイデアの巣窟なのだ実感した。

このクラゲの閃き以降、視線を惹きつける月の存在と、ぼんやりとする時間の意味を兼ね備えた、冒頭のフランス語の表現が一層好きになった。いわゆる「タイパ」をあえて追及しないでいるうちに、ゆっくりと頭をめぐる記憶が、何も無い空間にぽつんと、それでいて確かなヒントを残していく。それはアポロ十一号の乗組員が月面に旗を立て、人類の歴史に足跡を残したように、その後の歩みの始まりや通過点となる。何も生まれないはずの時間から、生み出される思考のピースもあるはずだ。

果たして、ぼんやりとする時間は悪なのか。ぼんやりとした先に、何か結果に繋がるものはあるのか。たまには少し地球を飛び出して、月まで足を延ばしてみてはいかがだろうか。